森田果著

『実証分析入門――データから「因果関係」を読み解く作法――』

日本評論社　2014年　vi+328ページ

町北朋洋（まちきた ともひろ）

本書は外国を研究対象とする研究者にとって重要な一冊だ。特に，自ら現地に足を運び聞き取り調査を実施しながら，または資料・史料を収集することで，定性的な情報を用いて社会変化の要因を解釈する研究者こそ，得られるものが大きい。各章は登山道具に例えられる。どの山に登るべきか，つまり外国社会のどういった因果関係を研究対象にすべきかを本書が教えるわけではない。しかし本書は，本格的な登山・野営道具を使えばどのような景色が見えるのかを手短に幅広く教えてくれる。

本書で紹介されている方法と事例は，家計や企業単位の非実験データを用いて社会の因果的推論をいかに具体的に行うかを関心事としてきたミクロ計量経済学に依拠している。こうした定量分析とは計算機を使った魔法であると考えている人や，過度に定量分析に期待を寄せている人に対し，本書は「そうではない，因果的推論の本質は議論の前提条件を透明化し，反証可能性を確保する点にこそあるのだ」と丁寧に説得する精神に貫かれている。さらに，数値ではなく法文・判決・記事・演説などを分析対象とする量的テキスト分析の紹介など，今後の実証研究で必須となる新装備まで用意されている。

投薬を例に，本書で強調されている因果的推論の方法を紹介しよう。頭痛薬の処置効果を知ることは容易ではない。頭痛薬を飲んだとしたら，薬を飲んだ後の頭痛の程度と，仮に薬を飲まなかった場合の頭痛の程度（これは事実ではないので，反事実と呼ぶ）の差を取る必要がある。しかし，我々は，薬を飲む，飲まないという両方の選択を同時に行うことはできない。片方の選択の結果しか実現しないので，誰にも事実と反事実の両方を観察することはできない。頭痛薬服用の因果効果を得るためには，限られた情報から反事実，つまり仮に薬を飲まなかった場合の頭痛の程度という「あり得た」状態を推し量り，事実と反事実の差を取らなければならない。因果的推論の難しさがここに焼き付けられている。

そして本書の眼目は後半部，因果的効果の推定以前に行うべき「仕込み」の解説にある。仕込みとは，研究が問題にしている集団は何で，その集団は母集団社会とどのような関係にあるかという母集団の確認に留まらない。本書では，推定・検定といった統計的推測を行う以前に，識別問題を丁寧に議論する必要性が強調されている。これが仕込みに相当する。本書では「判別条件」として表現され，研究者が用いた情報でその研究が問題にしている因果関係を正しく捉えているかを問うものだ。つまり，社会環境の変化が人間行動の変化を引き起こすという因果関係を想定した時に，議論の出発点となる社会環境の変化が，そこで問題となっている人間行動の変化とは無関係に生じた証拠を確保することだ。この識別問題への対応として，常識と理論を使って社会制度の設計・変更を吟味することが役立つのだと，本書で繰り返し示されている。

定性的研究においても，解釈を行う以前に，この識別問題を大きく扱うことによって，理論が示唆する被説明変数と説明変数の関係（構造）を正しく読者に伝えられる。どの情報・仮定から主張が導かれているかが明確になり，解釈を支えている論理の透明度を高めることができる。ここから新しい理論が提案され，正しく批判される。定量分析，定性分析にかかわらず，このように構造を明確に仮定し，構造を仮定したからこそ生じる識別問題に向き合いつつ，代替的な理論と自身の主張を区別することで，異なる知識・視点を持つ者同士の議論の足場を作る。この足場が社会の豊かさにつながるだろう。

過去の登山家の厳しい要求から生み出された多様な道具を学ぶことで，私たちは安全な登山を独創的なやり方で実現することができる。本書は，外国社会の研究という難易度の高い山への挑戦を続ける本誌読者の背中を強く押し，登山の喜びを世に正しく伝えることを手助けする一冊だ。

（アジア経済研究所新領域研究センター）